美藝圖已哉。此本舊藏山城鳴瀧常樂院。今歸紀伊新宮東君有。頃者借得影印數部。以餉同好。及還之。又爲錄考語。以明此本之可貴。在其因發揮經義。未得與夫錦繡珠玉。僅喜人目者。同列而論焉。

考古學の栞（第八回）

文學博士　濱田耕作

（附錄）主要參考書

考古學研究法を論究したる著書は、西洋に於いても其の數多からず、今諸雜誌等に現られたるものを除き、成書として出版せられたる書籍の主なるものを擧げて左に簡單なる解題を試みん。其の各國考古學、各分科考古學に關するものに於いても、序說等に概論的部分多少なきに非ずと雖も、これ亦た煩を厭ひて之を揭げず。たゞ二三先史考古學一般及び考古學的發見史に關するものを附載せり。

(一) Methods and Aims in Archaeology, by W Flinders Petrie. (London, 1905) ペトリー氏「考古學の研究法と其の目的」全一冊

本書は餘輩の最も屢々引用せる所にして、著者は倫敦ユニヴァシチー、カレッヂ大學の埃及學

教授にして、多年埃及の發掘に從事し、方今世界の斯學者中の泰斗なり。教授ははしめ英國の考古學をも研究し、埃及の外パレスタイン地方の發掘にも携り、著書頗る多し。本書は考古學的發掘及調査の實際的方法の指導として、適切なること其の右に出るもの無く、悉く著書多年の經驗より出で獨創的分子最も多し。たゞ考古學の意義其他理論に關する部分甚だ少なきは、英國學風の然らしむる所なるも、聊か憾なき能はず。其の內容は

一、發掘者　二、辨別（デスクリミネーション）
三、人夫　四、作業の配備
五、野外に於ける記錄法
六、複製（コピーイング）法　七、寫眞法
八、遺物の保存法　九、荷造法
十、出版　十一、組織的考古學
十二、考古學的證據　十三、考古學の道德

の諸章より成り、著者專門の埃及考古學の方面より例證を引くこと多きも、一般考古學者にも適切なるは云ふを須ゐず。

(二) L'archéologie, sa valeur, ses méthodes, par W. Deonna. (Paris, 1912) デオンナ氏

「考古學の價値と其の研究法」全三冊

著者は瑞西の學者にして、其の論述する所主として希臘羅馬の考古學に係ると雖も、美術の樣式に關する理論等に於いては、其の議論大に見る可きものあり。第一冊は考古學研究法を述べ、先づ考古學の意義より一般社會の誤解等を擧げ次に斯學の發生に及び、其れより從來の研究法に關する諸種の誤謬、美術の流派等を論せり。第二冊は美術の法則を詳論し、第三冊は美術的韻律（リズム）を希臘美術によりて例證せり。要するに本書は形式樣式殊に發達せる美術的作品の樣式論に於いて參考す可きもの多しとなす。

(三) Les recherches archéologiques, leur buts et leurs procédés, par J. de Morgan. (Paris, 1906)

、モルガン氏「考古學の目的と其の方法」全一冊

モルガン氏は西亞及埃及の發掘に大事業をなせる現代の大家なり。本書は其の親しく經驗せる所によりて、發掘の方法注意を說ける點に於いて、ペトリー氏の著と共に頗る尊重す可きものあり。たゞ彼の如く詳細親切ならざるやの感あるを免れず。其の理論的に亘らざる點も亦たぺ氏に相似たり。其の各章章は次の如し。

一、考古學と歷史　二、探檢す可き地方に對する準備的智織　三、考古學的資料の各種類　四、發掘作業　五、古代都市の發掘　六、寺院及宮殿遺址の發掘　七、墓地の發掘　八、古代鑛山及石切場　九、古代の交通路　十、遺物の運搬保存　十一、研究結果の出版

(四) Il "Methodo" nelle esplorazioni archeologiche, per G. Bonni. (Roma, 1913) ボンニ氏「考古學的發掘の方法」全一冊

こは美術報告書(Bollettino d'arte)第七年第一號及第二號に出でたる者の拔刷なり。ボンニ博士は羅馬フォルム及パラチノの發掘家として知られ、伊太利に於ける斯學の泰斗なり。吾人は本書によりて伊太利學者の發掘方法と、遺物保存法に就きて知るを得可く、其の建築的遺跡の取扱と、美術的思想を重じたる點等を特に注意す可し。

(五) Die älteren Kulturperioden in Orient und in Europa von O. Montelius. (Stockholm, 1903) I. Die Methode. モンテリウス氏「東方及歐洲の古文化代諸期」第一冊「研究方法論」モンテリウス氏は瑞典ストックホルム大學に於ける斯學の泰斗たり。氏は本書に於いて、古代東方及歐洲に於ける石器時代以降青銅器鐵器時代の研究に先

ち、其の方法を述べ、相對的年代絶對的年代より型式(チプス)論に及び、其の型式學(チポロギー)を論じて、伊太利古代の留針、土器青銅器及び蓮華紋等を擧げて之を例證したるは、考古學研究法上最も聽く可き議論の一なりとす。

(六) Archaeologie, von F. Koepp. (Sammulung Goeschen, 1911) ケップ氏「考古學全三册」

獨逸ミュンステル大學教授ケップ氏の著にして序論、遺物の發見、遺物の記述、遺物の解明、遺物の時代決定の諸章より成り、考古學全般の概念と研究法を明にせる點に於いて、好箇の教本なり。たゞ其の主とする所は希臘羅馬考古學にして、引用の諸例も殆ど皆な是に限られたるは、考古學を更に廣義に解せんとする吾人の所見と相同じからざるものあるを見る。

(七) Handbuch der Archaeologie, von H. Bulle. (München, 1913) ブルレ氏「考古學綜覽」一ノ一

本書は獨逸ウュルツブルグ大學於けるに考古學教授ブルレ氏が二十餘名の斯學の諸大家と共同編著せんとせる考古學綜覽とも名く可き大著の一部なり。歐洲戰亂と共に其の續册の發行と聞かざるは遺憾なり。若し本書にして完成せられんか、恐くは一部の書册に收めたる考古學書として、最も便利なるものたるを失はざりしなる可し。余等は戰亂終結と共に、其の續篇の逐次刊行せられんことを希望して已まず。其の第一册の目次を擧ぐれば次の如し。

A. 考古學の本質と研究方法（ブルレ氏）

一、名稱　二、定義　三、研究法　四、考古學の目的　五、關係諸學との關係

B. 考古學史（ザウエル氏）

一、文藝復興期に至る研究　二、バロック期　三、ウインケルマン以前　四、ウインケルマン　五、ウインケルマンと同時代諸家及其の

後繼者　六、科學的考古學の發達　七、新氣運　八、現在の考古學

C.　古代遺物の壞滅と再現（ウィガンド氏）一、壞滅　二、偶然の發見　三遺物の科學的探索　四、科學的探索の方法　五、保存及聚集　六、遺物の科學的記載複製等及七、遺物の保存法

にして、第一冊の半部を盡せり。第二冊は古代美術史、第三冊は樣式手法等の理論を說くの豫定なりしが如し。本書はケップ氏の著と同じく主として希臘羅馬の美術考古學に偏せるは、獨逸學派の常として已むを得ざる所なるのみならず、編纂の精到は見る可きも、創見的分子の少なきを其の弊となす。

(八)　Manuel d' arcl.éologie, prehistorique, celtique et gallo-romaine, par J. Dechelette (Paris, 1908)

デシユレツト氏「考古學教本」全二卷四冊

デシユレツト氏は佛蘭西ロアンヌ博物館長にして、今次の歐洲戰亂に際して戰死せる人なり。本書は先史、ケルト及ガウル羅馬時代等特に佛國を中心とせる各時代の考古學を簡潔に叙述せるものにして、此種著書中の白眉なり。就中第一卷は先史時代を記し、冒頭先史考古學の定義及び研究法を論じたる部分は要領を盡せり。以下舊石器時代、新石器時代に及び、第二卷以下青銅器時代以降のことを記述したるが、考古學一般殊に先史考古學を研めんとするものゝ必讀に値するは諸學者の一致する所なり。

(九)　Authority and Archaeology, Sacred and Profane, edited by D. G. Hogarth. (London. 1899)

ホガース氏編「古典と考古學」全一冊

本書の編者は英國オクスフォード大學アシユモレアン博物館長希臘考古學の大家にして希臘羅馬の古典及聖書等の文獻と考古學的遺跡遺物と

の關係に就きそのドライヴァー、アーネスト、ガードナー、グリフイス、ハーヴァーフヒールド、ヘッドラム、及編者自身の諸論文を集めたるものにして、文獻と考古學的資料の關係を知るの上に於いて有益なるのみならず、ホガース氏の筆に成る序論には、考古學の意義解釋を論じ、頗る要領を得たるものあるを喜ぶ可し。

(10) Prehistoric Times, by Lord Avebury.(London, 1913) エーブリー卿「史前の時代」全一冊

エーブリー卿は卽ち舊のラボック氏なり。本書は氏の舊著を近く增修せるものにして、石器時代より青銅器時代舊鐵器時代に關する一般の知識を供給し、又た現代野蠻人との比較を試みたる點に於いて、英國人類學的考古學派の一古典と云ふも不可なし。先史考古學の研究家の先づ之を纏いて、他の諸書に亙る可きは、タイラー氏の「人類學」と一對たりと云ふ可きか。

(二) Urgeschichte Europas, von S. Müller. (Strassburg, 1905) ミユラー氏「歐洲原史」全一冊

著者は丁抹國の碩學にして、本書は歐洲を中心とせる舊石器時代以降青銅器、鐵器時代に就きて簡明なる論述を試み、希臘伊太利の古代文化との關係を明にせり。北歐考古學と希臘考古學との連絡點を發見し、廣義の考古學を建設せんと試みたるを認む可く、之をエーブリー卿の前著と比較すれば、殊に興味あるを覺ゆ。

(三) Urgeschichteder Menschheit, von M.Hoernes. (Sammulung Goeschen, 1905) ヘルネス氏「人類原史」全一冊

著者は墺國ウィン大學の敎授にして、數年前物故せる先史考古學の大家なり。本書は人類の自然界に於る位置より、人類文化の諸現象、人類の初現、石器時代、湖上住居、金屬時代等を單明に叙述し、特に金屬の發見傳播に關して意を用

ゐて論及せり。更に本書を大きくし、詳細に以上の諸問題を研究したるは、同氏の

(三) Natur-und Urgeschichte des Menschen, von M. Hoernes. (Wien u. Leipzig, 1900) ヘルネス氏「人類原史」全二冊

なり。第一章は人類の自然史にして、體質人類學の發達史、人種の起源發達と體質人類學の大要、人類と他動物との比較、人類の古さ及故郷、第四記人類、等を述べ、第二章は文化の原史にして先史の古學及自然民族の人種學の發達、文化の基礎、住居、火、武器器具衣服裝飾等を述べ、最後に國家道德法律交通商業、言語文學美術宗教及學術等の諸現象を論じたり。單なる記載以上に理論的考察を試み、人類學的心理學社會學的方面よりの觀察あるを喜ぶ可く、此種の智識を一部の書によりて獲得せんと欲するものの好參考書なり。

(四) Die archaeologischen Entdeckungen des neunzehnten Jahrhunderts, von A. Michaelis. (Leipzig, 1906) 同上英譯 A Ceutury of Archaeological Discoveries. (London, 1908) ミハエリス氏「第十九世紀考古學發見史」全一冊

著者は數年前物故せる獨逸に於ける希羅考古學の大家にして、本書は先づ第十九世紀以前の考古學上の發見を略叙し、次で奈破翁時代に及び、希臘、エトルリヤ、東方諸國に於ける著名なる發見を敍し、更に希臘の都市宗教的都會を述べ先史及び希臘の史前に及び、一八七〇年以後希臘伊太利及東方諸國に於ける發見を擧げ、最後に發見及科學の一章を設けたり。考古學發見史は本書を除きて、未だ他に良書を見ざるのみならず、希羅考古學を中心とせるも他の諸國にも及び且つ樣式論及び文獻と考古學との關係に就きての所論は最も聽くに足る。本書の英譯はガ

ードーナー教授の序文あり、原著を增補し、且つ寫眞版を加へたれば、却つて利便を加ふ。

先史考古學其他各國考古學に關する參考書の解題は、更に機を得て之を試むる可く「考古學の栞」は一先づ本稿を以て大尾となす。（濱田）

飯岡義齋

文學博士　高瀨武次郎

一　飯岡と篠田

飯岡と云ふ姓につきては『大日本人名辭書』に「イヒヲカ」とし、木崎氏の『賴山陽と其母』に「イノヲカ」と假名を附せり。次に飯岡とも又篠田とも兩姓を用ひたるは春水の作れる義齋の墓誌銘の中に此家の祖先に飯岡を姓としたる人も篠田を姓としたる人もあれば兩姓を時々用ひたらんか。義齋の親戚に篠田銕藏と云ふ人あり。卽ち之を梅颸女史の甥と爲す。斯かる理由にて時には篠田德安と記したるものを見るなり。誤りて飯岡義齋と篠田德安とを兩人と見る者なきに非ず、注意すべし

二　處士飯岡澹寧先生墓銘（賴春水作）

先生姓は源、諱は孝欽、字は德安、別號は澹寧、飯岡義齋を以て行はる。其先は佐々木義實より出づ。義實の別子を飯岡義政と曰ふ。先生七世の祖なり。曾祖閑德は大阪に住し、醫を以て生を爲し。篠田氏を稱す。祖は忠益、考は忠嘉、妣は南氏。先生獨り儒を業として徒に授く。初め十餘歲にして怙恃を亡ひ、自ら幼弟を撫育す。艱苦の狀は言ふべからざる者あり、二十歲にして鈴木貞齋に從うて游ぶ。貞齋は其の謹篤を愛し、提誨尤も厚し